

若手教師・教育創造MTG ミーティング

第3回オンラインミーティング & 有志メンバーによる授業研究・レポート

日々の授業実践や思いを語り合い、 若手としての共通の課題を追究する

全国の若手教師が地域を超えてつながり、これからの教育について語り合う「若手教師・教育創造MTG」。お互いの考えや取り組みへの理解が深まる中で、より具体的なテーマについて議論を交わす場面が増えてきた。今回は、3回目を迎えたオンラインミーティング、そして、オンラインで行われた有志による授業研究についてレポートする。



レポートその1 第3回オンラインミーティング（8月下旬実施）

これからの教師像を描きながら、
若手として全国への「提言」を模索

これからの教師の役割を
より広い視点で捉える

3回目となった全体のオンラインミーティングでは、2人の教師の質問提起（囲み参照）を受けて議論が進められた。テーマの1つは、「未来の教師が担う役割」。教科指導、進路指導、探究活動、部活動指導など、様々な場面で多様な役割を担っている

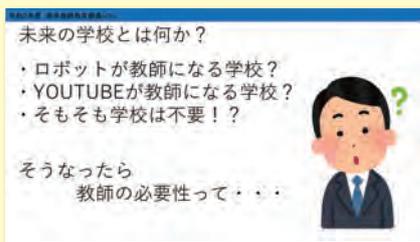
るのが現在の教師だが、ICTが発達する中で、「目の前の仕事に一生懸命取り組むだけでよいのか」「教師個人として、また、教師集団の1人として、教師のあり方をどのように考えればよいのか」といった問いが投げかけられた。もう1つのテーマは、新学習指導要領の実施に向けて、教育課程の見直しやカリキュラム・マネジメントの推進が求められる

私の教育活動 **喜** **怒** **哀** **楽**

テーマ1 ● 学校の「未来」課題

未来の教師が担う役割とは？

埼玉県教育委員会 浅見和寿先生



浅見先生の 思い

現在、私たちは、教科指導、進路指導、探究活動、生活指導、部活動指導など、様々な役割を担っているが、未来の学校において教師が担うべき役割は何か。全国の先生方の考えを聞きたい。

浅見先生の発表に対する意見・感想

- ◎生徒を、大学生や地域、企業とつなぐコーディネーター、そして、生徒と校外の人たちとの対話を支援するファシリテーターの役割が求められていることを実感している。
- ◎生徒が集い、お互いの熱量を感じながら学ぶ場がますます大切になってきている。生徒一人ひとりの個性を理解した上で、それぞれに応じた指導ができるのが教師だ。

私の教育活動 喜 怒 哀 楽

テーマ2 ● 学校の「今」 課題

それぞれの教育活動を「つなげる」には？

広島県立広島工業高校 川口広司先生

■ 相談 (私の悩み)

新学習指導要領 (再来年度の新入生) の実施に向けて

1. 教育課程の見直し, カリキュラムマネジメントの進捗度は?
2. 教員間で教科横断的な視点を持ち, 授業ができていますか?
3. 先生方の「それぞれの教育活動」はどう「つながって」いますか?

川口先生の 思い

新学習指導要領の実施を前に、私たちが取り組むべき課題は山積している。教師間の連携と同時に、教師一人ひとりに「自らの教育活動をほかの教育活動とつなげる」発想が求められると思う。先生方の考えと実践を聞きたい。

川口先生の発表に対する意見・感想

◎生徒の「なぜこれを勉強するの?」といった疑問は、その生徒の視点を広げるチャンスであるとともに、普段の授業を探究学習や特別活動へ「つなぐ」きっかけになることを意識したいと思った。

◎新学習指導要領の実施を前にして、教科横断的な視点での授業研究が自分にはもっと必要だと感じた。

る中、「教師間で横断的な視点を持ち、授業を始めとする多様な教育活動をつなげていくにはどうすればよいか」といった投げかけがあった。SDGs (*1) や Society 5.0 (*2) など、社会課題を多角的に捉えながら、これからの社会を包括的に描く力が生徒には求められている。同様に教師にも、自身の専門科目の枠にとらわれず、「これからの学校」における自らの役割を大胆に描いていく力が求められていることを、メンバーである若手教師たちが感じ取っているからこそ、そうしたテーマが提起されたのだろう。

全国へ若手教師の「提案・提言」を発信

全国の若手教師が定期的に語り合う中で、「この場で様々な刺激を受け、それぞれが自校でアクションを起こしているが、そうした刺激を自分たちだけのものにとどめるのではなく、何らかの形にして、全国の先生方にもっと広く伝えたい」「私たちがこの場で得た『元氣』を、全国のほかの先生方にも分けていきたい」といった声が上がることが増えてきた。そして、メンバー間での対話を発展させて、日本の「これから

の教育」を創造する上で考えるべきこと、起こすべきアクションを全国に提案・提言していこうという、言わば本ミーティングの新たな目的が生まれるに至った。現在は、1年間の活動を通じたメンバーの気づきを「提案・提言」としてまとめていくため、神奈川県立愛川高校の森迫恒平先生がファシリテーターとなつて、オンライン上でのマインドマップ作成などにより、メンバーの相互の関心、強みを可視化する試みを続けている。今後、メンバーたちは、「これからの教育」を考えた時に、現状から変えていくべきこと、新しい

レポートその2

有志メンバーによる授業研究 (8月上旬実施)

協働性を育むアクティブ・ラーニングの実践を題材に、これからの授業のあり方を語り合う

予習を起点にした協働的な授業実践を紹介

これまでのオンラインミーティングでは、「これからの授業」のあり方が何度も話題となった。そこで、有志メンバーがオンラインでの授業研究を企画。岩手県立遠野高校の



リアルタイムで共同編集が可能なデジタルホワイトボードをオンライン上で活用して、各メンバーの興味・関心を整理し、全国への提案・提言へとつなげていく予定だ。

く始めるべきことを整理し、ともに取り組んでいくことを本誌面などを通して発信していく予定だ。

佐藤紘大先生が、数学の授業での実践を紹介した。佐藤先生が目指しているのは、生徒が当事者意識を持って参加し、楽しみながら学ぶ過程で、「よく生きる」ための資質・能力を育成する授業だ。具体的には、生徒は家庭での予習で課題を発見してから授業に臨み、グループで課題につ

*1 Sustainable Development Goals の略。2015年に国連が掲げた持続可能な開発目標のこと。「貧困をなくそう」「飢餓をゼロに」など、17の目標と169のターゲットから成る。

*2 AIやロボットなどの新たな技術を産業や社会生活に取り入れることで、新たな価値が生み出される「超スマート社会」。2016年1月に閣議決定された「第5期科学技術基本計画」の中で、目指すべき新たな社会の姿として提唱された。

いて探究し、最適解や納得解を見つけていく（スライド1〜5参照）。

授業で教師が果たす役割について、佐藤先生は「生徒が予習で発見してきた複数の課題を踏まえて、『クラスの共通課題』を提案すること」と語った。その授業で身につけてほしい知識や見方・考え方を生かすことのできる「クラスの共通課題」を設定できるかどうか、教師としての力量が問われるというわけだ。

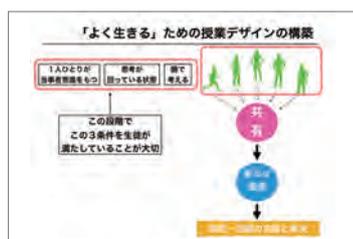
予習を起点にした授業を行うに当たり、佐藤先生は、なぜこのようなスタイルの授業を行うのか、授業の意義を説明することを大切にしている。時には授業の時間を割いて生徒と語り合う中で、「このような授業は、個の力を集団の力へとつなげる実体験であり、君たちがこれからの社会で『よく生きる』ために必要な

ものだ」と、熱意を込めて生徒に伝えることもある。未来の社会の姿を

思い描きながら、今行うべき授業のあり方を生徒と語り合い、生徒自身がその授業の必要性について納得すること、すべての生徒が予習に取り組むようになったという。

佐藤先生の実践を聞いた後、授業研究の参加者は、それぞれの感想や疑問点、関連する自身の取り組みを述べ、それに対して佐藤先生が、さらに自身の実践における発見や課題を語っていった。参加者の意見を基に、「生徒が教え合い、学び合う環境をどのようにつくるか」「生徒への問いを立てるのは誰であるべきか」「そもそも授業における問いとは何か」「1コマの授業、学期単位などでの資質・能力の評価はどのように行うべきか」など、様々なテー

マへと対話は広がっていった。参加者からは、「1つの実践を深く理解し、さらに参加者同士がお互いの実践を語り合う中で、自分の理想の授業が少しずつ見えてきた。まだまだパワーアップしなければと思った」「授業をする中で生まれた疑問や問題を、どんどん自分なりに昇華して、授業に仕かけを取り入れていく姿勢やその工夫に刺激を受け



スライド1 生徒が生涯を通じて学び続けられるよう、「よく生きる」ための授業を佐藤先生は追究している。



スライド2 生徒は、予習で自分が見いだした課題や疑問点を Classi (* 3) のアンケート機能を使って入力。授業はそれらを共有することから始まる。



スライド3 予習をする中で生徒が見いだした課題を、佐藤先生が「クラスの共通課題」として整理。それについての最適解を、個人やグループで考える。



スライド4 グループで考えた最適解をほかのグループに説明する。佐藤先生が重視する「集団の1人としての学び」を、生徒は常に意識することになる。



スライド5 授業の振り返りはオンラインツールを活用。関心・意欲・態度に関する自己評価を行うとともに、その日の内容を踏まえた見方・考え方の理解度を尋ねる。

*3 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合併会社である Classi 株式会社が提供する、学校教育での ICT 活用を総合的に支援するサービス。

授業研究

参加者の感想

個人の課題を共有し、より深い集団の課題に昇華した上で、協働して問題解決を図り、個人の思考力を鍛えようとする佐藤先生の授業は、とても勉強になりました。生徒が内容の習得に必要性を感じ、学ぶ・身につけるという行為に充足感を覚えることは、生徒の予習状況や学習の定着度を大きく左右すると、私も思います。「予習で抱いた疑問を授業で解決する」という学習の黄金サイクルは、望ましい学びのスタイルとして当然視されてはいても、多くの高校生にとって、その確立は簡単なことではありません。しかし、佐藤先生がおっしゃるように、生徒が授業を自分事として捉えるようになれば、生徒は望ましい学びのスタイルに近づいていくのではないのでしょうか。私が普段向き合っている問題の解決のヒントが得られた気がしました。（北海道・私立札幌第一高校／佐藤亮介先生）